

障害児に対する、身近な小楽器による表現を促すための活動 (第二報: キーボード)

— キーボードを取り入れた、表現を促進する働きかけの工夫及び「活動のダイアグラム」 —

(文中 Th.はセラピスト、Cl.はクライアント、< >内は曲名を、KB はキーボードを表す)

M G W 研究所 都築裕治

【はじめに】

先に、「縦の発達」と「横の発達」という概念により、Cl.の現在持っている力の使いどころをそのCl.に応じて創出し提供することもTh.の役割であることを述べ、その展開例としてリコーダーを用いた活動について報告した。今回は、その同じ文脈においてKBによる活動を報告する。

筆者は複数のCl.に対し、「横の広がり」を意図したKBを用いたさまざまな活動を工夫・実践しており、その活動事例における関わりや経過を検討することで、「KBを用いた活動のダイアグラム」作成を行った。それを活動事例とともに報告(ビデオも併用)し、Cl.の音出し表現を促すための一資料に資したい。

【対象者】

知的障害を持つ4才~24才、47名。

自閉症・ダウン症等。

【方法】

Cl.の状態に応じて、以下の働きかけを行った。

1. 手・指の機能が未発達なCl.への働きかけ
→打楽器的な扱い(手での叩き鳴らし)
2. キーへの注視を促す方法
→補助鍵盤の導入。
3. キーを操作する判断の負担を軽くする工夫による働きかけ→キーへの数字付け。色数字譜の導入。
指への数字マーク。

【結果】

上記の働きかけにより、Cl.それぞれの形でのKBによる活動が成立した。これらを整理し右記のダイアグラムを得た。

【考察】

Cl.への働きかけ、ダイアグラム作成を通して、これら活動の成立する要素として以下のことが見出された。

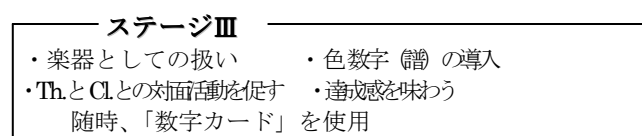
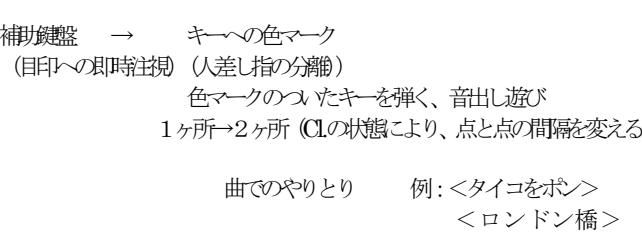
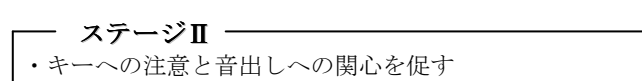
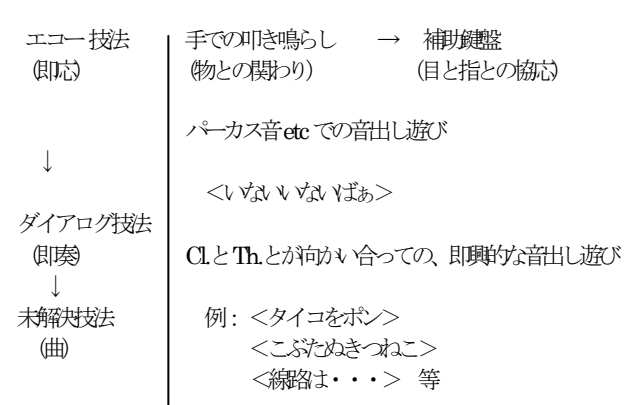
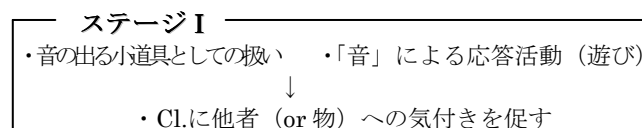
1. KBは重度のCl.に対しても、“応答性”の高い道具とすることが出来る。
 - ①キーに触れるだけで直ちに音が返ってくる(“打鍵”が不要)。これはタイコよりも容易。
 - ②音色の切り替えでCl.に応じた小道具に変化出来る。
例: パーカッション音の選択→タイコの代わりになる。
: ビブラフォン音の選択→余韻が長く残り、出した音がCl.にフィードバックされ易い。
2. 補助鍵盤・目印の使用によるキー押しの易活動可。
3. 数字の導入が、Cl.にとって分かりやすい演奏システムとなり、活動を推進している。
 - ①特に自閉症のCl.にとって数字といういつも変わらない記号は、興味と安定を引き出す素材である。
 - ②“演奏”出来るということが満足感・達成感を与え、活動の継続へとつながっている。
 - ③分かりやすいシステムでの活動をする事自体が、コール技法の役割を果たしている。

【終わりに】

その時のCl.の持てる力は同じでも、活動で使用する“道具”と“使用法”を工夫することにより、Cl.の表現出来るものが変化してくる。

それらの工夫はCl.の状態(発達段階・能力等)に応じて行われるべきものであり、このダイアグラムはCl.の状態にそった活動を考える際の「見取り図」としてTh.にその手がかりを与えるものである。それぞれのCl.の位置を見極めた展開をはかって行きたい。

【KB活動のダイアグラム】



- ① 人差し指(利き手)での一本弾き
キー: 右手部分への数字付け
1 3 5・・・赤 2 4・・・青
1, 2, 3, 4, 5
(ド レ ミ ファ ソ) 例: <ひげじいさん>
- ② 左右の人差し指での協応弾き 例: <カッコー>
キー: 両手部分への数字付け(左右対称に)
5, 4, 3, 2, 1 1, 2, 3, 4, 5
(ド レ ミ ファ ソ) (ド レ ミ ファ ソ)
- ③ 左手側に、赤(ド・ソ)と青(シ・ソ)の点を付け、色数字譜に応じて左手(1, 5指)で弾かせる。
- ④ 各指の分離使用を促す。
Cl.の各指に赤・青の色数字をマーク
- ⑤ 小節ごとの和音付け
左手: 色数字譜の一小節ごとに下線(赤 or 青)付け。